連載2

園のくらしを育む15

帰りの会の振り返りとけじめ

秋田喜代美

1　一日を振り返る時

帰りの会。皆が支度を終えて、丸く互いの顔が見える位置に座っている。「今日楽しかったこと、頑張ったことをお話ししてください」と五歳児担任の先生が子どもたちに声を掛ける。あっくんが話し始める。「ドッジボール」。「あっくんは途中から来たけど頑張ったんですよね」と先生があっくんの発言に応じると、「三連発で当てた」「直球だよ」「しんくんもすごかった」と、一緒にドッジボールをやっていた友達も思い出して、直球だとか他児の活躍についても話し始める。「あっくん、なかなかボールが回んなかったんだよね。でももらったらすぐ当てたんだよね、あっくん、ありがとう」と先生が語る。この先生の応答を見ると、先生は子どもたちがやっていたことをよく見ておられたことがわかる。次にけいちゃんが指名されて話し始める。「こおり鬼やっ

た」。先生が「一緒にやった子は？　鬼やった子は？」何人かが手を挙げる。「鬼はどうやって決めたの？」「じゃんけんで、えいちゃんが負けたんだよ」。「そうなんだ」と、先生はこおり鬼をやっていない子たちにも、こおり鬼はどうやって進んでいったのかを伝え、遊びを共有している。

次にさきちゃんが言う。「まりつき　しりとりなの」「え？」「くまってやって、まつって」「まり、やった子は？」先生はこの子が言ったことの中身がまだよくわかっておられないようだ。さきちゃんは続ける。「ま・つ・って2回ついたら次の子に回すの。そいで次の子が『つ・み・き』って続けて3回ついたら、また次の子にまりを回すの」。先生も理解され「おもしろーい」と言うと「しりとりまりつきなの」と答える。おそらく話し始めた時も遊んでいた時も「しりとりまりつき」という名前はその遊びについていなかった。でもやっていたのがまりつきでのしりとりだから「しりとりまりつき」なのである。振り返りの中で遊びに名前が与えられていく。すると別の子が「きりんは？」と聞く。「『き・り・ん』は『ん』だからもう一度初めから」とさきちゃんはルールを説明する。そうすると「皆でやるとおもしろいよ」という声が出てくる。「明日やってみたい」という声も出てくる。「でも、みんなでやると64個（年長児は64人いる）もボールないよ」と言う子が出てくる。「本当だ、足りないね」と先生が言うと、「1個を皆で回せばいいよ」との発言も出る。こうして振り返りは振り返りにとどまらず、明日の遊びへの期待を生み出していった。

振り返りがお決まりの先生に宛(あ)てての報告やお話の練習で終わらず、今日の遊びを子どもなりに振り返り、そしてそこから明日の遊びへの期待を生み出していく時間として位置付いているクラスの姿を見て、そこに子どもの育ちを感じ、子どもと先生がこの時間をとても大事に楽しみにしていることを感じた。

2　やわらかい気持ちでの思い出し

帰りの会は、その園や先生が何をどのように子どもたちと共有したいと思っておられるのか、一日の保育での子どもの経験と時間の重みがわかる。倉橋惣三は述べている。

「お帰りについては、今までの時間とは違います。この時だけは、先生の考えを強く表わしていくべきではないかと思います。……子どもとしての疲労もありましょう。また先生としても、いろいろのこともありましょう。……一日の幼稚園が終って、別れる前に、ぜひ納めをつけておきたいと思うことのあるのは、だれでものことでありましょう。……子供たちとしても、その日の一日の生活に正しく結末をつけてこそ、組が一つにまとめられ、ちゃんと整えられてこそ、先生や、友だちに別れる作法であり、また大事な子供たちを町へ手離す先生の心やりでもありましょう……幼稚園にいる間は、幼稚園にいるということを忘れさせたいが、帰る時には幼稚園から帰るらしい感

じを、幼児なりにも持たせたいと思うのです。……そのためにはお帰りはもっと静かに時間をかけても、いいものだと思います。……やわらかい気持で一日を思い出して、足どりも静かにおもむろに帰らせることにしたいものです。……貴い一日の幼稚園の終りです。よく心を入れてやりたいと思います」（倉橋惣三『幼稚園真諦』より）

幼稚園では預かり保育が増え、保育所でも長時間保育が増えている。その中で園での「お帰り」の時間が子ども自身に対してもつ意味は、時代とともに変化してきている。しかし子どもが自身の経験を振り返ること、それを仲間と共有することで、互いに受け入れ合い語り合う中で一体感を醸し、一日を感じてまた明日以後への期待を生み出す時間はどのような保育時間になっても必要ではないだろうか。それが「生活を生活で生活へ」とより高次のくらしを営む子どもたちへの礎になると感じる。家庭から園へ、園から家庭への時間的けじめがつけられないくらしを大人が生み出し、やわらかい気持ちで子どもたちが生活を思い出す機会を奪っているなら、帰りの会を節目に私は家庭と園のくらしのけじめこそ再考することも必要ではないのかと感じる。それが子どものくらしを大人が守ることではないだろうか。

（東京大学大学院）

引用文献　倉橋惣三『幼稚園真諦』フレーベル館　一九五六年